

水仙月の四日

宮沢賢治

青空文庫

雪婆ゆきばんごは、遠くへ出かけて居をりました。

猫ねこのやうな耳をもち、ぼやぼやした灰いろの髪をした雪婆ゆきばんごは、西の山脈の、ちぢれ
たぎらぎらの雲を越えて、遠くへでかけてゐたのです。

ひとりの子供が、赤い毛布けつとにくるまつて、しきりにカリメラの事を考へながら、大きな象の頭のかたちをした、雪丘の裾すそを、せかせかうちの方へ急いで居りました。

(そら、新聞紙しんぶんがみを尖とがつたかたちに巻いて、ふうふうと吹くと、炭からまるで青火が燃える。ぼくはカリメラ鍋なべに赤砂糖を一つまみ入れて、それからザラメを一つまみ入れる。水をたして、あとはおくつくつくつくと煮るんだ。)ほんたうにもう一生けん命、こどもはカリメラの事を考へながらうちの方へ急いでゐました。

お日さまは、空のずうつと遠くのすきとほつたつめたいところで、まばゆい白い火を、どしどしお焚たきなさいます。

その光はまつすぐに四方に発射し、下の方に落ちて来ては、ひっそりした台地の雪を、いちめんまばゆい雪花せつくわ石膏せきこうの板にしました。

二疋ひきの雪狼ゆきおのが、べろべろまつ赤な舌を吐きながら、象の頭のかたちをした、雪丘の

上の方をあるいてゐました。こいつらは人の眼には見えないのですが、一ぺん風に狂ひ出すと、台地のはづれの雪の上から、すぐぼやぼやの雪雲をふんで、空をかけまはりもするのです。

「しゆ、あんまり行つていけないいたら。」雪狼のうしろから白熊しろくまの毛皮の三角帽子をあみだにかぶり、顔を苹果りんごのやうにかがやかしながら、雪童子ゆきわらすがゆつくり歩いて来ました。

雪狼どもは頭をふつてくるりとまはり、またまつ赤な舌を吐いて走りました。

「カシオピイア、

もう水すゐせん仙が咲き出すぞ

おまへのガラスの水みづぐるま車

きつきとまはせ。」

雪童子はまつ青なそらを見あげて見えない星に叫びました。その空からは青びかりが波になつてわくわくと降り、雪狼どもは、ずうつと遠くで焰ほのほのやうに赤い舌をべろべろ吐いてゐます。

「しゆ、戻れつたら、しゆ、」雪童子がはねあがるやうにして叱しかりましたら、いままで雪

にくつきり落ちてゐた雪童子の影法師は、ぎらつと白いひかりに変わり、狼どもは耳をたてて一さんに戻つてきました。

「アンドロメダ、

あぜみの花がもう咲くぞ、

おまへのラムプのアルコホル、

しゆうしゆうと噴かせ。」

雪童子ゆきわらすは、風のやうに象の形の丘にのぼりました。雪には風で介殻かひがらのやうなカタがつき、その頂には、一本の大きな栗くりの木が、美しい黄金きんいろのやどりぎのまりをつけて立つてゐました。

「とつといで。」雪童子が丘をのぼりながら云いひますと、一疋の雪ゆき狼おいのは、主人の小さな歯のちらつと光るのを見るや、ごむまりのやうにいきなり木にはねあがつて、その赤い実のついた小さな枝を、がちがち噛かじりました。木の上でしきりに頸くびをまげてゐる雪狼の影法師は、大きく長く丘の雪に落ち、枝はたうとう青い皮と、黄いろの心しんとをちぎられて、いまのぼつてきたばかりの雪童子の足もとに落ちました。

「ありがたう。」雪童子はそれをひろひながら、白と藍あゐいろの野はらにたつてゐる、美し

い町をはるかにながめました。川がきらきら光つて、停車場からは白い煙もあがつてゐました。雪童子は眼を丘のふもとに落しました。その山裾やますその細い雪みちを、さつきの赤毛あかけ布つとを着た子供が、一しんに山のうちの方へ急いでゐるのです。

「あいつは昨日、木炭すみのそりを押して行つた。砂糖を買つて、じぶんだけ歸つてきたな。」雪童子はわらひながら、手にもつてゐたやどりぎの枝を、ぶいつとこどもになげつけました。枝はまるで弾丸たまのやうにまつすぐに飛んで行つて、たしかに子供の目の前に落ちました。

子供はびつくりして枝をひろつて、きよろきよろあちこちを見まはしてゐます。雪童子はわらつて革むちを一つひゆうと鳴らしました。

すると、雲もなく研みがきあげられたやうな群ぐんじやう青の空から、まつ白な雪が、さぎの毛のやうに、いちめんに落ちてきました。それは下の平原の雪や、ビール色の日光、茶いろのひのきでできあがつた、しづかな奇麗な日曜日を、一そう美しくしたのです。

子どもは、やどりぎの枝をもつて、一生けん命にあるきだしました。

けれども、その立派な雪が落ち切つてしまつたころから、お日さまはなんだか空の遠くの方へお移りになつて、そこのお旅屋で、あのまばゆい白い火を、あたらしくお焚たきなさ

れてゐるやうでした。

そして西北にしきたの方からは、少し風が吹いてきました。

もうよほど、それも冷たくなつてきたのです。東の遠くの海の方では、空の仕掛けを外したやうな、ちひさなカタツといふ音が聞え、いつかまつしろな鏡に變つてしまつたお日さまの面めんを、なにかちひさなものがどんどんよこ切つて行くやうです。

雪童子ゆきわらすは革むちをわきの下にはさみ、堅く腕を組み、唇くちびるを結んで、その風の吹いて来る方をじつと見てゐました。狼おいのどもも、まつすぐに首をのばして、しきりにそつちを望みました。

風はだんだん強くなり、足もとの雪は、さらさらさらうしろへ流れ、間もなく向ふの山脈の頂に、ぱつと白いけむりのやうなものが立つたとおもふと、もう西の方は、すっかり灰いろに暗くなりました。

雪童子の眼は、鋭く燃えるやうに光りました。そらはすっかり白くなり、風はまるで引き裂くやう、早くも乾いたこまかな雪がやつて来ました。そこらはまるで灰いろの雪でいっぱいです。雪だか雲だかもわからないのです。

丘の稜かじは、もうあつちもこつちも、みんな一度に、軋きしるやうに切るやうに鳴り出しまし

た。地平線も町も、みんな暗い烟けむりの向ふになつてしまひ、雪童子の白い影ばかり、ぼんやりまつすぐに立つてゐます。

その裂くやうな吼ほえるやうな風の音の中から、

「ひゆう、なにをぐづぐづしてゐるの。さあ降らすんだよ。降らすんだよ。ひゆうひゆうひゆう、ひゆうひゆう、降らすんだよ、飛ばすんだよ、なにをぐづぐづしてゐるの。こんなに急がしいのにさ。ひゆう、ひゆう、向ふからさへわざと三人連れてきたぢやないか。さあ、降らすんだよ。ひゆう。」あやしい声がきこえてきました。

雪童子はまるで電気にかかつたやうに飛びたちました。雪婆ゆきばんごがやつてきたのです。

ぱちつ、雪童子の革かわむちが鳴りました。狼おいのどもは一ぺんにはねあがりました。雪わらすは顔いろも青くろざめ、唇くちびるも結ばれ、帽子も飛んでしまひました。

「ひゆう、ひゆう、さあしつかりやるんだよ。なまけちやいけなひよ。ひゆう、ひゆう。さあしつかりやつてお呉くれ。今日はここらは水仙すいせんづき月の四日だよ。さあしつかりさ。ひゆう。」

雪婆ゆきばんごの、ぼやぼやつめたい白髪しろがは、雪と風とのなかで渦うずになりました。どんだんかける黒雲の間から、その尖とがつた耳と、きらきら光る黄金きんの眼も見えます。

西の方の野原から連れて来られた三人の雪童子も、みんな顔いろに血の気もなく、きちつと唇を囁かんで、お互あひさつ挨拶あひさつ拶あひさつさへも交はさずに、もうつづけざませはしく革むちを鳴らし行つたり来たりしました。もうどこが丘だか雪けむりだか空だかさへもわからなかつたのです。聞えるものは雪婆ゆきばんこのあちこち行つたり来たりして叫ぶ声、お互の革鞭かはむちの音、それからいまは雪の中をかけあるく九疋くひきの雪狼どもの息の音ばかり、そのなかから雪童子ゆきわらはふと、風にけされて泣いてゐるさつきの子供の声をききました。

雪童子の瞳ひとみはちよつとをかしく燃えました。しばらくたちどまつて考へてゐましたがいきなり烈はげしく鞭をふつてそつちへ走つたのです。

けれどもそれは方角がちがつてゐたらしく雪童子はずうつと南の方の黒い松山にぶつかりました。雪童子は革むちをわきにはさんで耳をすましました。

「ひゆう、ひゆう、なまけちや承知しないよ。降らすんだよ、降らすんだよ。さあ、ひゆう。今日は水すゐ仙月せんづきの四日だよ。ひゆう、ひゆう、ひゆう、ひゆうひゆう。」

そんなはげしい風や雪の声の間からすきとほるやうな泣声がちらつとまた聞えてきました。雪童子はまつすぐにそつちへかけて行きました。雪婆ゆきばんこのふりみだした髪が、その顔に気みわるくさはりました。峠の雪の中に、赤い毛布けつとをかぶつたさつきの子が、風にか

こまれて、もう足を雪から抜けなくなつてよろよろ倒れ、雪に手をついて、起きあがらうとして泣いてゐたのです。

「毛布をかぶつて、うつ向けになつておいで。毛布をかぶつて、うつむけになつておいでひゆう。」雪童子は走りながら叫びました。けれどもそれは子どもにはただ風の声ときこえ、そのかたちは眼に見えなかつたのです。

「うつむけに倒れておいで。ひゆう。動いちやいけない。ぢきやむからけつとをかぶつて倒れておいで。」雪わらすはかけ戻りながら又叫びました。子どもはやつぱり起きあがらうとしてもがいてゐました。

「倒れておいで、ひゆう、だまつてうつむけに倒れておいで、今日はそんなに寒くないんだから凍やしない。」

雪童子は、も一ど走り抜けながら叫びました。子どもは口をびくびくまげて泣きながらまた起きあがらうとしました。

「倒れてゐるんだよ。だめだねえ。」雪童子は向ふからわざとひどくつきあつて子どもを倒しました。

「ひゆう、もつとしつかりやつておくれ、なまけちやいけない。さあ、ひゆう」

雪婆んごがやつてきました。その裂けたやうに紫な口も尖つた齒もぼんやり見えました。「おや、をかしな子がゐるね、さうさう、こつちへとつておしまひ。水仙月の四日だもの、一人や二人とつたつていゝんだよ。」

「えゝ、さうです。さあ、死んでしまへ。」雪童子はわざとひどくぶつつかりながらまたそつと云ひました。

「倒れてゐるんだよ。動いちやいけない。動いちやいけないつたら。」
 狼どもがおいの気がひのやうにかけめぐり、黒い足は雪雲の間からちらちらしました。

「さうさう、それでいゝよ。さあ、降らしておくれ。なまけちや承知しないよ。ひゆうひゆうひゆう、ひゆうひゆう。」雪婆んごは、また向ふへ飛んで行きました。

子供はまた起きあがらうとしました。雪童子は笑ひながら、も一度ひどくつきあたりました。もうそのころは、ぼんやり暗くなつて、まだ三時にもならないに、日が暮れるやうに思はれたのです。こどもは力もつきて、もう起きあがらうとしませんでした。雪童子は笑ひながら、手をのぼして、その赤い毛布を上からすつかりかけてやりました。

「さうしてねむつておいで。布団をたくさんかけてあげるから。さうすれば凍えないんだよ。あしたの朝までカリメラの夢を見ておいで。」

雪わらすは同じとこを何べんもかけて、雪をたくさんごどもの上にかぶせました。まもなく赤い毛布も見えなくなり、あたりとの高さも同じになつてしまひました。

「あのごどもは、ぼくのやつたやどりぎをもつてゐた。」雪童子はつぶやいて、ちよつと泣くやうにしました。

「さあ、しつかり、今日は夜の二時までやすみなしだよ。ここらは水仙月の四日すいせんづきなんだから、やすんぢやいけない。さあ、降らしておくれ。ひゆう、ひゆうひゆう、ひゆうひゆう。」

雪婆んごはまた遠くの風の中で叫びました。

そして、風と雪と、ぼさぼさの灰のやうな雲のなかで、ほんたうに日は暮れ雪は夜ぢゆう降つて降つて降つたのです。やつと夜明けに近いころ、雪婆んごはも一度、南から北へまつすぐに馳はせながら云ひました。

「さあ、もうそろそろやすんでいゝよ。あたしはこれからまた海の方へ行くからね、だれもついて来ないでいいよ。ゆつくりやすんでこの次の仕度をして置いておくれ。ああまあいいあんばいだった。水仙月の四日がうまく済んで。」

その眼は闇やみのなかでをかしく青く光り、ぼさぼさの髪を渦巻かせ口をびくびくしながら、

東の方へかけて行きました。

野はらも丘もほつとしたやうになつて、雪は青じろくひかりました。空もいつかすつかり霽はれて、桔梗ききやういろの天球には、いちめんの星座がまたたきました。

雪童子らは、めいめい自分の狼おいのをつれて、はじめてお互あひさつ挨拶しました。

「ずるぶんひどかつたね。」

「ああ、」

「こんどはいつ会ふだらう。」

「いつだらうねえ、しかし今年中に、もう二へんぐらゐのもんだらう。」

「早くいつしよに北へ帰りたいね。」

「ああ。」

「さつきこどもがひとり死んだな。」

「大丈夫だよ。眠つてるんだ。あしたあすこへぼくしるしをつけておくから。」

「ああ、もう帰らう。夜明けまでに向ふへ行かなくちや。」

「まあいゝだらう。ぼくね、どうしてもわからない。あいつはカシオペアの三つ星だらう。みんな青い火なんだらう。それなのに、どうして火がよく燃えれば、雪をよこすんだらう。」

らう。」

「それはね、電気菓子とおなじだよ。そら、ぐるぐるぐるまはつてゐるだらう。ザラメがみんな、ふわふわのお菓子になるねえ、だから火がよく燃えればいゝんだよ。」

「ああ。」

「ぢや、さよなら。」

「さよなら。」

三人の雪童子ゆきわらすは、九疋くひきの雪狼ゆきおいのをつれて、西の方へ帰つて行きました。

まもなく東のそらが黄ばらのやうに光り、琥珀こはくいろにかゞやき、黄金きんに燃えだしました。丘も野原もあたらしい雪でいつぱいです。

雪狼ゆきおいのどもはつかれてぐつたり座つてゐます。雪童子も雪に座つてわらひました。その頬ほほは林檎りんごのやう、その息は百合ゆりのやうにかをりました。

ギラギラのお日さまがお登りになりました。今朝は青味がかつて一そう立派です。日光は桃いろにいつぱいに流れました。雪狼は起きあがつて大きく口をあき、その口からは青い焰ほのほがゆらゆらと燃えました。

「さあ、おまへたちはぼくについておいで。夜があけたから、あの子どもを起きなけあい

けない。」

雪童子は走つて、あの昨日の子供の埋まつてゐるところへ行きました。

「さあ、ここらの雪をちらしておくれ。」

雪狼どもは、たちまち後足で、そこらの雪をけたてました。風がそれをけむりのやうに飛ばしました。

かんじきをはき毛皮を着た人が、村の方から急いでやつてきました。

「もういゝよ。」雪童子は子供の赤い毛布けつとのはじが、ちらつと雪から出たのを見て叫びました。

「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし。」雪わらすはうしろの丘にかけあがつて一本の雪けむりをたてながら叫びました。子どもはちらつとうごいたやうでした。そして毛皮の人は一生けん命走つてきました。

青空文庫情報

底本：「宮沢賢治全集 8」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年1月28日第1刷発行

入力：あきら

校正：伊藤時也

2003年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水仙月の四日

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>